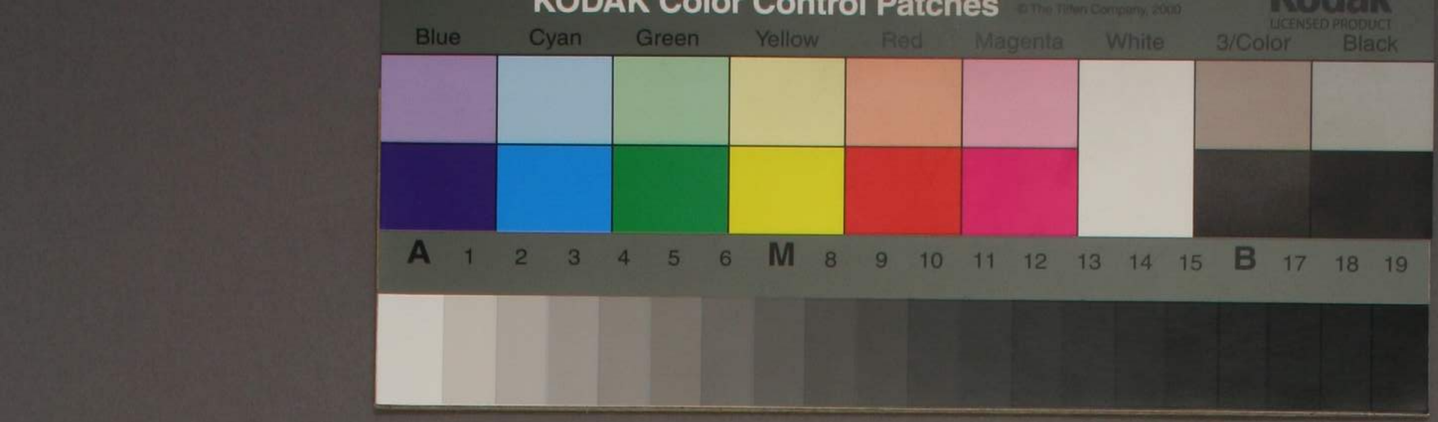

KODAK Color Control Patches
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

ル 4
3526
1

門ル4
號3526
卷1

藤波二位季忠卿

二緑園主人

伊勢參宮名所圖會卷之一

目録

齋宮群纪　栗田口王祭　十禪師祠　佛光寺廟所　鍛治が井　當豊長寺栗田寺栗田口寺旧地　日山神明　日岡嶺　天智天皇廟陵　御陵川　護國講寺

京三条橋　青蓮院　同辻の故事　阿弥陀堂　定雅山荘旧跡　號上人軒九躰町　本食上人庵　御廟野　薮の下　人康親王旧蹟

白川橋　門出經ヶ　牛頭天王祠　定法寺旧地　栗田口関白旧蹟　栗田宮旧蹟　松坂　義經ヶ幸松　鏡山　明王寺　毘沙門堂

栗田口　金藏寺　首藤刑部墓　鍛治が池　田村丸別業　比丘尼坂　栗田山　山科　御陵村　安祥寺　奴茶屋

昭和十六年一月二十日寄
尼野喜英氏贈

諸羽明神　十禪寺
袖川原　ぞうさし茶屋
走井　両圀寺
近江圀滋賀郡　禪丸祠
関清水　関小川
逢坂ゆふ住げ多　関大明神禪丸宮
関寺　長安寺
大津里　八丁れの辻
打出濱　四宮明神
同精神故事　りろこ川
義仲塚　苾蕉堂
腦所熱門　天満宮
腦所城 并去橋舟　腦所の猿

巡地藏　四宮川
小関城　追分

逢坂山　逢坂関旧蹟
関守神　駒迎
立圀観音　関清水禪丸宮
牛の塔　近松御坊
小町庵　城跡
同祭礼引山　松本村號鞠社
石塲 并坂迎　義仲寺
同塚　この川馬塲村別條
八大龍王社　八大龍神社
信腦の濱　栗津原 并合戦

兼平寺　田畠社
八幡社　五百羅漢
鳥井川御霊社　苾蕉幻住庵旧跡
榛谷堂 并瀧　石山寺 并祖師法堂
源頼朝石塔　同乳母龜谷石塔
暦海硯掛石　悪源太義平塚

晴嵐の池　塊塚
守る川　兼平塚
源氏の同 并些家七論　夢の浮橋
汗屐圀　紫式部石塔
龍穴池

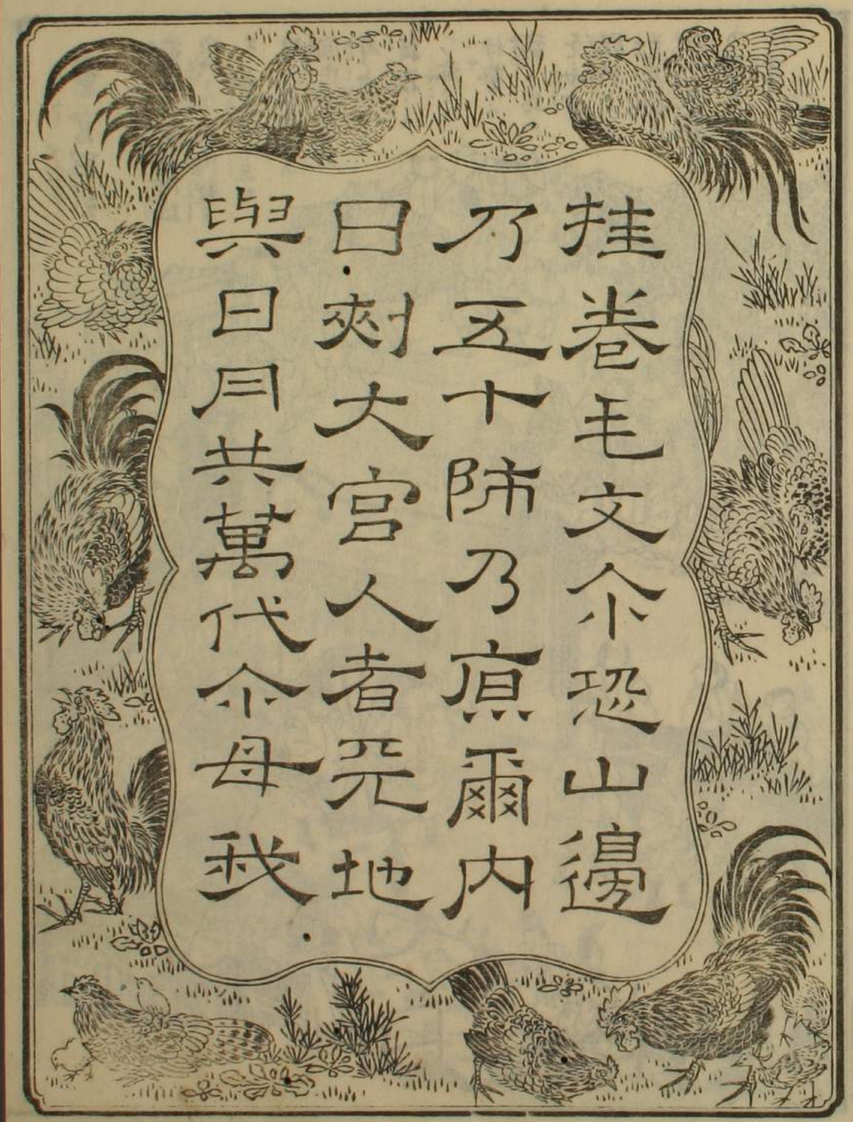
一 此書ハ一國一覽の物ニ乍ら況ンや京都より伊勢參宮の紀行を委曲せり紀行の里數を記さゞるべからず況ンや途中の要用の地名ニおゐてをや連綿を組ミ數葉の色紙を厭ひ文義の略せざるあらんとをゞ

一 宮道の外左右ニ見渡を間道の名區ハ大抵一二里三里の程と限りて本文ニ連續そろ〳〵▲の標を以て分てり

一 寺社并ニ名石の古説等の迂怪奇偉を苦ニ實否糺ゝて妄説ニ似ることを竊ニ省て一ニ真ニ依ル物あり

一 名石ニ至ては若ニ委ゝ事ともハ其委細ニ雖きりの坂土佛の參詣記ニ長明の記を以て照ゝ合せて止り士佛ハ忌利義詮公の典薬ニて國學の文人ニして長明ハ吠德流の射の人ニて加茂宮の氏人法名ハ蓮淵とぞ

一 古道の名石を彰道ニ泥せゝりの國ハ今ニ從ひ其理ニ文中ニ記を



一近江國建部明神の遠うりの仏ふ古道之ほり此ふ名不も有るもおゝし扛撰記
之ゆびど有ゑ詠畧ぜり

一伊勢新名帳とつくるりの九十箇所ぞうこれあり尤大中臣宮忠のおの教合せの
書ようもじすれ

一名る紀名の名或い松の名るどは美の児戯さうとの人でも足る俗ゑちふく出ぜう

一文中ゑ神社式内と記せーい延喜式神名帳に載る古社古宮之と知れ是ーー

一神書之五部の書るどつくるい古書之とも多けども学者の説々區々そーて黒ら
いーきど有ゑ多くい是を引用せど

一佛刹の縁記之い佛像の出現るどは慈と其元を怪しくせんがるう多くい漁人の
細ゑ引あげーー等の数十之七八い除きて記さど

一引書い古書の外い物陽雑記神都考宮川夜話等の新尚文中不くる附記をる
ぶらーー悉く挙ゑ正道

齋宮群行

昔大神宮の御杜
の代〳〵て内親王
を齋宮とよばせ
給ふ三年の
間内裏ならび
に齋宮
祓潔
て都より
伊勢へ
詔使を發
を齋宮
群行のよう
その其の間
かく此書
の例と
ひとし

尚事實を
下の齋宮村
の條に委曲に
記せり

三條橋（さんでうのはし）

△それより科までの都名所を譲りて実よろしきを育く其そばぐくころにへをくみて布とぶたを圃も暗を仰と浅くるい浦ふ

京三條橋　古岡秀吉公　増田長盛ふ奉行せしめ作る和迚東海道五十三驛これうちとじむ橋の茶後旅舘多し　橋い石柱の擬擬とを長サ三十七丈餘擬寶珠ふ銘あり　増田い三奉行の一人なり四条五条の橋のゆるは年記ふ詳ならず　慶長年記ふ已関東下向の時ふ義仲白川のもとにて引多松義重重忠川ふ添ふうち此本橋とぶとぐめ川を隔て対谷くうち良ふのするは知小物場ひく三条小川へ引退く和ふ中三拉ぶむるろ已とふりの荒馬を跳てこしもの富ふの物ふて祖り水筒をとろひしいへけ不ありう。川幅つうしへ廣しふ今ハ郡町とへるハ其川ふ添ふ遠うるもの元其名あり　擅王法林寺△白川橋　仏川ふとい白川村を南へ斜ふ今の南禅寺まで流ふ来ようり西へまがりて加茂川ふ入今の擅王其所の落合にして今擅王の裏ふ仏一間餘の堀のごとくめぐらし今ハ是元白川筋の跡なり今の白川橋かゝる所ふ元橋ありて南ふ流る川筋ふ是を小川とへふ古書ふ所ふ譲りて実よろしきを育く其そばぐくころにへをくみて布とぶたを圃も暗を仰と浅くるい浦ふ

京三條橋　古岡秀吉公　増田長盛ふ奉行せしめ作る和迚東海道五十三驛これうちとじむ橋の茶後旅舘多し　橋い石柱の擬擬とを長サ三十七丈餘擬寶珠ふ銘あり　増田い三奉行の一人なり四条五条の橋のゆるは年記ふ詳ならず　慶長年記ふ已関東下向の時ふ義仲白川のもとにて引多松義重重忠川ふ添ふうち此本橋とぶとぐめ川を隔て対谷くうち良ふのするは知小物場ひく三条小川へ引退く和ふ中三拉ぶむるろ已とふりの荒馬を跳てこしもの富ふの物ふて祖り水筒をとろひしいへけ不ありう。川幅つうしへ廣しふ今ハ郡町とへるハ其川ふ添ふ遠うるもの元其名あり　擅王法林寺△白川橋　仏川ふとい白川村を南へ斜ふ今の南禅寺まで流ふ来ようり西へまがりて加茂川ふ入今の擅王其所の落合にして今擅王の裏ふ仏一間餘の堀のごとくめぐらし今ハ是元白川筋の跡なり今の白川橋かゝる所ふ元橋ありて南ふ流る川筋ふ是を小川とへふ古書ふ所ふ譲りて実よろしきを育く

糸小川ふ迚くとろふ此小川ふて今古川町と唱和其あとなりそ乃形のごうて溝の大なる流ふあり

栗田口　栗田口ハ栗田ふの口とふふなり　栗田口ハ西上栗田ふ今ハ栗田口ハ西栗田ふの口とふふなり

栗田口ハ此辺ふの総名うて小白川ふ今の是勝村聖護院二条新地のうちをでて小白川ふ今古書ふ所ふ白川とあり

栗田口ハ此辺ふの総名うて小白川ふ今の是勝村聖護院二条新地のうちをでて小白川ふ今古書ふ所ふ白川とあり　今洛中洛外とふふ古書ふ所ふ白川とあり　是ハ加茂川ふ東ハ一面ふ白川ふり仏一流是ふり

古跡あり略之

青蓮院　京極大閤師實公の御ふ行玄大僧正開基也當院筆道の免許あり是ふ迚くとろふ筆法ハ尊圓親王ふ御祖ふて御代々書跡相續ひく高逸ふ神ふまし〳〵御書風ふ御家流ふ稱ふ

青蓮院　京極大閤師實公の御ふ行玄大僧正開基也當院筆道の免許あり是ふ迚くとろふ筆法ハ尊圓親王ふ御祖ふて御代々書跡相續ひく高逸ふ神ふまし〳〵御書風ふ御家流ふ稱ふ

門出蛭ふ神明社　舊地ハ聖護院ふの森ふの小ふあり今ふ迚ハ青蓮院御境内庚申堂ふの傍ふ移ふ

門出蛭ふ神明社　舊地ハ聖護院ふの森ふの小ふあり今ふ迚ハ青蓮院御境内庚申堂ふの傍ふ移ふ　其後二条通栗田口ふ上ふ其旧地を距ふ遠ふ非ふ

田領にうたし　其後青蓮院御境内庚申堂ふの傍ふ移ふ　其後二条通栗田口ふ上ふ其旧地を距ふ遠ふ非ふ

田領にうたし　其後青蓮院御境内庚申堂ふの傍ふ移ふ　其後二条通栗田口ふ上ふ其旧地を距ふ遠ふ非ふ

の向地を今ハ路ふ成ふ

金藏寺來地藏　古れ牛若丸奥ふ加下向ふの門出ふ額ふ掛ふし所ふ名ふとふ仏ふ

金藏寺來地藏　古れ牛若丸奥ふ加下向ふの門出ふ額ふ掛ふし所ふ名ふとふ仏ふ

庚申堂　大師堂　元三大師ふ

庚申堂　大師堂　元三大師ふ

辨財天　尊勝院△

辨財天　尊勝院△

十禪師の神祠　青蓮院境内ふあり　百練抄ふ青蓮院ふ古書ふ十禪師ふ

十禪師の神祠　青蓮院境内ふあり　百練抄ふ青蓮院ふ古書ふ十禪師ふ

辻

白川橋

粟田口天王祭

毎歳九月十五日貢夜二度の渡御あり神輿ゐ〜仏の弊をゐて振立をる其余氏の所よりも弊奉る者連て陸の其飾いろ〳〵てゐ〳〵

貢の粟田
御殿よへ夜ハ
白川橋と誠て
水際を智恩
院さくらの一ツ
橋へ少ノ此橋
の上にて弊の
曲技工妙と見を
其路行てゐ〳〵
燦ぬび〳〵
きよ水國のね〳〵
夜寅の刻ゐ

又御茶とうふ多あり是いと今の黒谷乃の廣道（今廣路となれる者の事なり）三条通の邊を（附言義経記を案商吉次牛若紙奥丸へ奥州へ下る時の文に明日吉日よてふるかさのおくくの門出せんとて云々と有て此時の事なり）一条堀川の栗田口十禅寺の系にて給ふ（師の事なるべし）のさまにて（一の義経記の書振うへ）とうふ多あり其へことうり圖にも（一基の社地なてあり）を後ゝ青蓮院領営のこゝ堤師の辻にも御茶とうふ多ありといふことも（附言）

牛頭天王社　青蓮院の東にあり東陽坊忠易勸請して元弘乙亥（人家の脊戸とあり）○平治の合戦の義経記に義朝主従三騎を討ちとりて後みうそ紛んとせし時六条の西にて敵三騎を討ちとりて後みうそ紛んとせしと有ハ此邊の事なるべし）

回禄の後災利益の産土なりとそ明應九年卜部兼倶に命じ

再び勸請ありて感神院新宮の額あり則栗田口の鎮社也（例祭九月十日山城志云牛頭天王三社一ハ栗田口園御ゝ祭る社ハ吉田村よあり西天皇と稱し聖護院村と共よあり一ハ感神院新宮と稱し東天皇と稱す）

悪源太義平が忠臣十六騎の一人山内首藤刑部俊通が墓（三条通廣ゝを西へ行事凡半丁余今名を所ゝ人家の脊戸とあり）○平治の合戦の義経記に義朝主従三騎を討ちとりて後みうそ紛んとせし時六条の西にて敵三騎を討ちとりて後みうそ紛んとせしと有ハ此邊の事なるべし）

阿弥陀堂　服檀親鸞上人植髪のる像を安置せ△

定法寺門地　堀地御坊と号ゝ宣號卿の記にも見へたり（此名今存せ

鍛治が池　良恩ちの傳よ出あり今へ殺と号ゝ○（附言鍛治が井　青蓮院御境内大谷氏の敷の内よあり）今俗の名よ栗田の小鍛治の上よ多く住々系なり就中為三大隅る系圖に新御所とふハ此院の御事にて御制作の殊よハ十七の箱よ納り能狂言の栗田口為馬之巫る久國のよなり鍛治が池井とも久國を師範よ名さる是蕃鍛治の始めゝ鍛治の名天下よ聞ゆ後鳥羽院鍛工を好ゝ給ひて院中よ召ゝ此院の御事にて御制作の殊よハ十七の箱よ納り能狂言の栗田口為馬之巫る久國のよなり鍛治が池井とも小鍛治宗近が古跡と誤なり

右大臣為宗宮雅之山荘旧蹟（栗田村よあり和名ハ二條殿と号と拾遺集序の作者ゝ三代実録云元慶三年九月四日右上天皇法和院ゝ遷ゝて栗田院よ御ゝ坐ゝ其地よ押ゝ寺ゝ為ゝ）○栗田口関白山荘旧蹟（栗田村よあり和名ハ栗田口と号と拾遺集序の作者ゝ三代実録云元慶三年九月四日右上天皇法和院ゝ遷ゝて栗田院よ御ゝ坐ゝ其地よ押ゝ寺ゝ為ゝ）

菅豊長亭　空花集よ見へたり

栗田宮舊跡　栗田院ともよ栗田口の旧蹟也（山槐記よ芸よ栗田口の寺）

栗田寺　あり昔これ清和離宮の旧地ゝ

栗田村の小名地名よ圓覺寺ともよ

栗田口十禅師辻の故事

著聞集云一條院の御時御祕藏の鷹ありけるめんくとりのひなどもゐてゐるいみじくなれむ鷹を栗田口十禅師の辻築ざて馳ㇾ自ら人のゐ𡋽を𡋽ゐて人を𡋽られけりうゐてひさしとゝゐ𡋽ゐ給ふ御鷹ゐさるよりゐ鳥ゐをとりて此鷹をゐんでゐおもゐ逃捜ゐ仕まつりけりゐとゐひてゐる

着あり約此人とらして
ゐるいせゐるに南殿の池
に鳧集りけるひさりゐる鷹
をゐりゐれバあいせてよめ
鯉をゐてさりゐるまゐゐるも
ゐさりゐる帝其ゐ方と同せん
まい着曰此鷹のまゝさゝご狡の
鷹ゐ先母のゐうゐひとして後ゐ乃
着さと仕ゐりのゐゐ即せいゐ感ありて後深
圃に田園を賜ゐる抱接ゐ率これり

古今集物名
うき名をいとそのうと紀雲のあいこれ女蔡
此あいは水尾帝深草のうりあるさの地へうつ
なりしをよめるにや
圓覺寺 そ佛すの多くに死のうれをこそ
新古今
雨風もくふのたちやのこしむ法花むしく 海よ死をうしく 若麥議雅有

拾芥抄よ京えさい白川と見へうり永久白川の説よ叶つ

比丘尼坂 本名あび 音此辺よびくに居て往来よ物乞ふ名い殘りう 西を
こうのさ町といふをしあさうりう小側い南往寺にて西こうのさ東こもの
こてて南側い谷川町なり○此こりのさらふ一切經谷金剛寺阿弥陀堂應仁の兵火よ焼ふこれ
新尊を葬の上よ
安置せ一系なり

號上水 関原与市 **六軒町** 此同二町之与市よ従九人討ふ 菩提のる石佛九
ふ栗田死左のふる南禪寺領九ふ其内三体い今あり石のふい栗田
を打越くて十八丁奥よ大日山と云あり往古栗田死の治い死頂の号ふ○南禪寺領のふ
こと日の号の同を乳母う嬢とふ 御公う町奉行所の北よ栗田

松坂 栗田口より日の岡へのぼる坂をふ ○平家物語 加茂川さうとうちまさう栗田
口松坂へ
長明方集
日岡嶺 此岳の左りのふよ幾ふ年を経ぬ松と拙と押りへふも死逢坂ふるけう里々り
附言 青ようの鋼の青陀うみ代の松坂ふへふの松なくは
石藏室町殿御參宮私記よ應永三十一年 十二月十四日

我もまくふふ都よへ風先けうまくむふあふ坂のふ
松坂よもをね年くの御參宮よことさら此不一もみ嵐の松九名所あくへて
度毎の祝詞よあひねるも祀意のさうくむふ系なり

君を行み代の死さく松坂をいく十廻まう越て見死へき

栗田山 栗田口 **日岡嶺** 此岳の左りのふよ幾ふ年を経ぬ松と拙と押りへふも死逢坂ふるけう里々り
此岳の名たよづり 御道を南あ死さして約ふ丸ふ此不の谷こう
当る石仏細米して楽焼の **本食上人の庵** ○義経ふ幸松の右掛みへ
附言 明智光秀の号ふ毎夜内裏ふ俊二ふ侍のやふれよのうふ之る本方吉 猪尾吉晴よ命じて是ふ退
一山綾よ大津よ抜ひく捕ふ一綾よ日の岡ふ行く死ふ其死よ綾て詩歌あり
主仇有」前白双空 殺身曝尸報君公
可憐晋國刺衣客 共感生涯一夢中

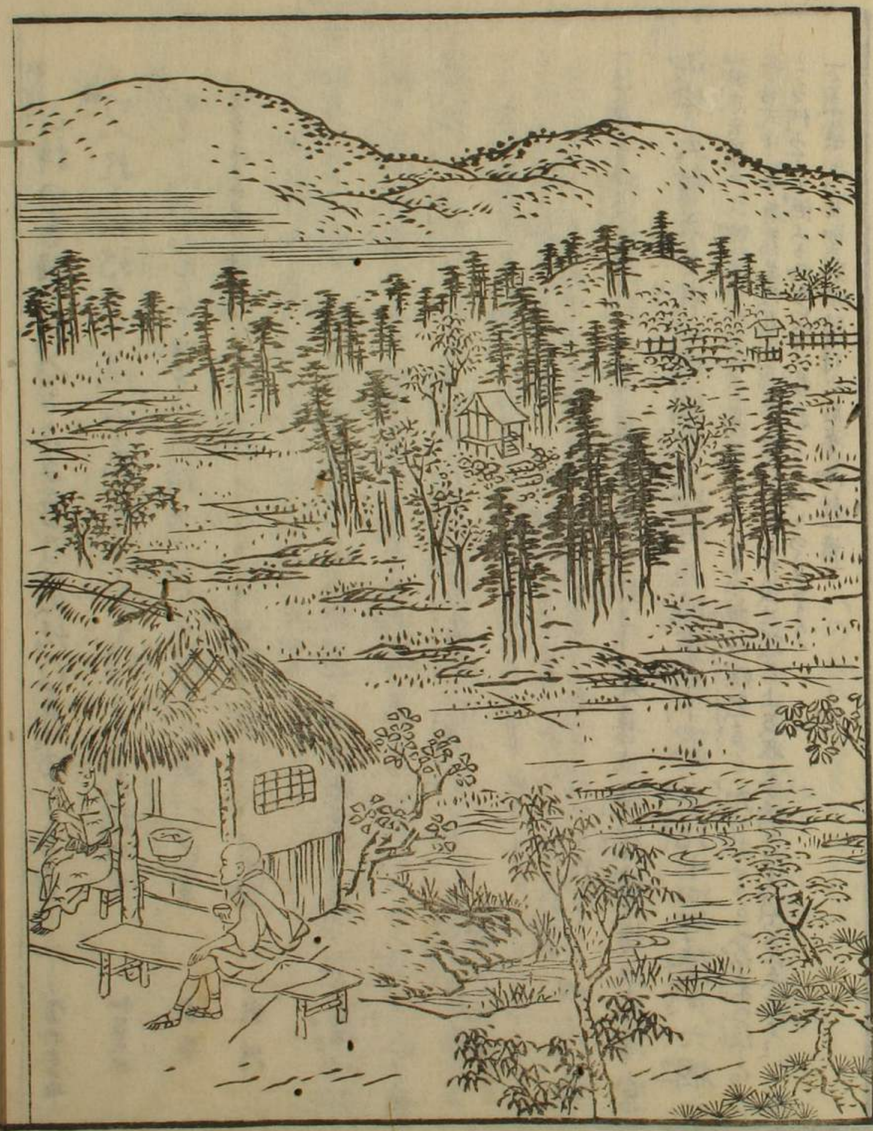
山科 ふ科とふ云都て八十七村あり 枕名所い○ふ科川○ふ科野○
青羽ふ 逆坂ふ此よりふ名あり **鏡山** 名あり ○**花ふ** 御ふよ **小栗栖**
槙雄ふ ○**四宮川** ○**石田野** 御ふよ ○**小幡** 共よ名系にしてふ科の内ふ
古今 ふ科の青羽の游れ春ふよ死へく我ふめやも

石和漢人

日岡嶺（ひのとがそのみね）

續古今
たゝ一鷹（ひと）の
そらに
もれ系
狩（かり）くもく
八日の
岡（をか）
きぎも
なく
ふり

土御門院



天智天皇廟陵
即沖廟跡

名所

ム科の春朋の川つさよみる及ね波のこそ咲

かくれ江ゆ打ちそ鳴みよかくるよりそのム科の里　和泉式部

かつら人のろをそ押りふム科のこそれ里の秋夕の雫　家隆

雫さえて鶉なくなるム科のいそれ野の秋のゆふ暮　祝阿

天智天皇御廟　逢坂を御廟野ゆふ街道より三町斗り左へ入る森にて小祠ある是皆天智天皇の御陵なりと云ふ山城志に云ふ陵戸六烟。

名所

天智天皇在山城國宇治郡兆域東西十四町南北十四町陵戸六烟。

山城志云陵戸六烟の内今二烟のみて嘉暦建武の頃迄は八烟ありしと延喜式中務省条に凡十二月奉二諸陵一とある何れも供ふる物をつゝる物ありて其の内に此御陵も有るなり

一万葉集　天皇聖躬不豫時大后奉御歌一首

名所

天の原ふりさけみれい大王の御かミいのちいかゝなりけむ

天皇崩千時童謡

こゝろのゝしき鮎。鮎こそいかゝなれ。鮎こそいかゝなれ。水葱の下芹の下我ゝ〳〵

鏡山　陵村の西小丘あり　万葉集従山科御陵退散之時作歌　長歌

八ゝそゝき我大君のかしこくや御陵つくるム科のそこのやまもと

此歌によれば御廟を建ふるありと見へたり

額田王

御陵村　御陵川　教の下村　皆ム科の内なり

安祥寺　△廟號文徳実録文徳天皇の御事に云ふ山科の宮の後の田邑の山陵に葬奉る再建せしとぞ

明王寺　御ふるよし　明王寺の内なり

△慈覚大師入唐帰朝の後貞観三年十月紀朝臣真雄を遣して当寺の五大虚空菩薩を治せしむ仁明帝の大后渡和帝の后也。伊勢物語安祥寺の御ありさまの事も見へたり　拾芥抄云安祥寺の五大虚空菩薩を治せしむ仁

了光山護國講寺　日蓮宗ム科の標林也△

仁明天皇第二の皇子此寺山科宮人康親王舊跡地名あり

依おいてまた四宮川原の地名あり　弥ム科の宮とよめり

○三代実録貞観元年九月七日出羽権介従五位下禅師の御ふとふる仁

安祥寺

伊勢物語
むかし田村の帝と
やをとめかとおも
まし〳〵其時の女
御たゝきこゆや
こまそうく〳〵それ
失給ひて安祥寺
にてみまさし〳〵く〳〵
さゝげもの奉まそく〳〵
たてまつりあはせむる
ものゝ捧げむる
ありそこぐく乃
さゝげものをま
の枝に付て堂
の前にたてまつれ
がとゞめさらう

堂の前に
勅使ゐる
ゆうえん
〳〵〳〵中略
〳〵のごとく
題みてまの心を
ある狩奉らせ給ふ
右のむまの〳〵
ちうく〳〵おき
あめたびて
〳〵〳〵
〳〵のごとく
うちてぞふみ
あふことの
まのまに
ちとせ
ちよべ

右田村帝の文徳天皇のゝ
むまのごとく業平のまね

君や
そで
くらべ

四宮村
四宮川
巡地藏

東雲玲

やぶ入
乃
あふこの

親王の御母之其宮「きのくによのみ里の渡よあり名ろいと面白きおくそまるつきゆ君あとき
ことけをさざこころまさるのうこよ此うこをつけてをりろ

あろよもいそそろろろ月ぬ心をなんせんようおろれい　紫平
後撰　たろろくて学にろようにいと枠の宮のまま[ほ]物を　三条右大臣

毘沙門堂御門跡△　奴茶屋△

諸羽明神　四宮明神とも云。その昔の宗生の守護神也。旧宮の氏神ありしと
十禅寺　旧宮村の小山村の小祠なり。この宮の氏神ありしと
巡地蔵堂△　六角堂路傍にあり　俗よい地蔵とよぶ

○寛裏記曰、西光法師の建立なり。蓮華王院の御蒼
薩を造り奉らんと欲して六波羅の地蔵菩薩を一体造りたてまつる。
芸ふ縁せらるゆ中納言信西が夢に天女十八来り九月廿九日の朝地蔵
供養せらるべしと告げ給ふ。仍て其日に至りこれを中奥せらるゝ云々

四宮川　女祥寺村の旧宮川より出て小関城の
宮川原　一名神の川原　源は三井の寺より出て小関城の
小町家跡　旧の宮ゝ川下を堀川とゆ　旧宮を経て旧
今朝よりいかでゝの宮ゝの秋風やゝあの坂もおゝしとゝは

ろゝ旧の宮とかくしてよろり小町小野小町も仁明朝和の法師
も旧宮体ませゝ瓦ろべゝ是もゝ秋のうゝん

ゝ神の川原ゝろ名ありゝ
都をはけさぞゝろ旅ころも神の川原の雫ありけり　永実内大臣
附言　拾遺　ゝゝもゝゝゝ心地のろゝゝに旧の宮川原ゝろゝ神ゝろゝゝ
ゝ人のおろまろ名ありその辺ろゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
風眼もやゝゝひつようろうち入て扨ゝの辺ろゝゝゝゝ
もゝく往絶よゝれゝゝをゝれて三旧ゝ多もゝゝゝゝゝ
ゝれよ地蔵そゝと此歌の事にゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝり明日天帝新地蔵菩薩一体造立供養ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝんと知りへゝごまゝ眼のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いそゝ風眼ゝゝなろろゝたん

○ごゝれ茶屋　綺よ六地蔵ろの標石あり左よ小関城の細ろあり
遅分　京と綺辺ゝ別ろ蒼なり　彼ろの西を横来村ろいふゝれ地名をよぶゝも
遅坂ともいふ　○札場ろ尚図上よまろゝと

○大津繪　遅ろ強よ世の誘ろいろく此地ろ名物ろろうゝり
往て旅客ゝ絵を勧ゝ聞きゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝの去ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
松門ろろゝ戯ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝろゝ風流ゝ画人ありてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ旅ゝ遅ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
大津絵師あれゝも其ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

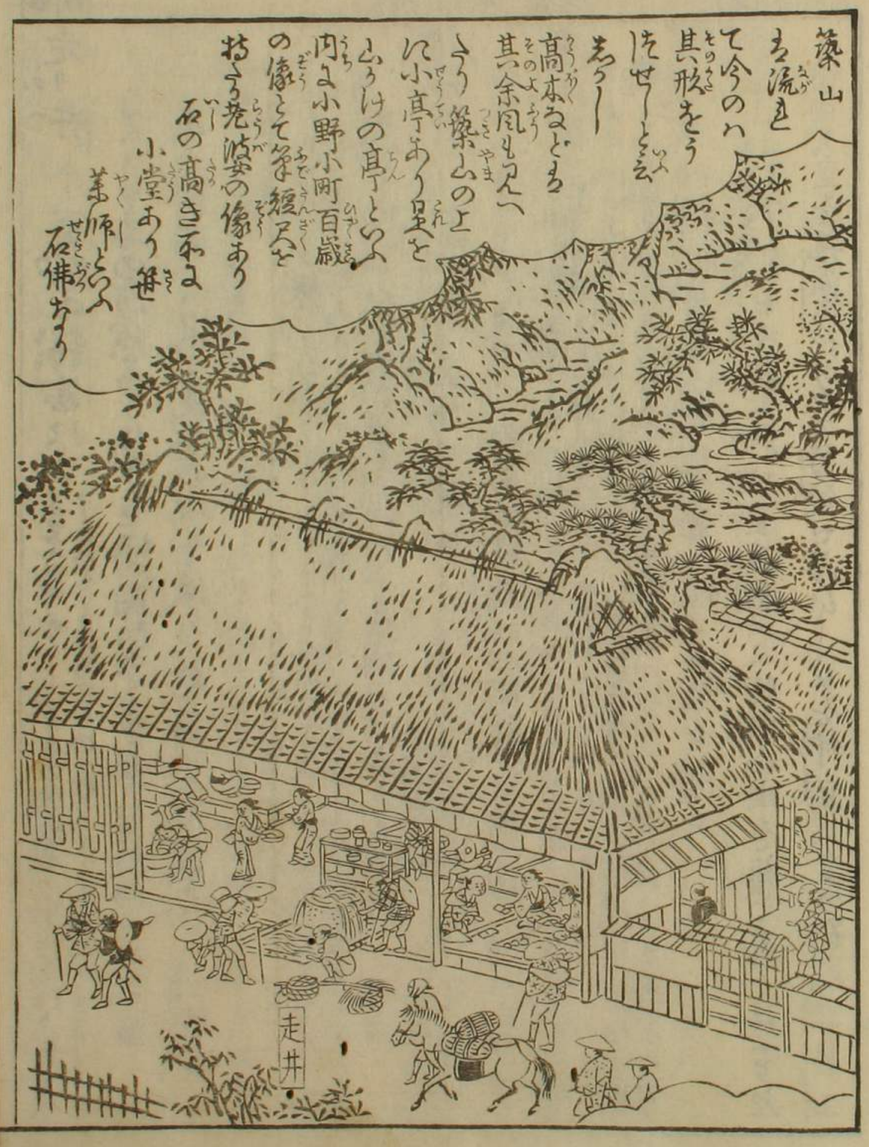
大津絵師の筆のさゞ〳〵先を俗ろゝ

大津 追分

此石東國より来る人
宇治らうえ
糸への別もろ〳〵
有う追分ろうふ
里より拾弐丁紙迄
坂ともえ大津ともえ
うり札場の侍う
柳縁先紅の標
石あり先に添へ
うる文
六地蔵後う辻
とうふ有ら標題うく
して文だうりあり
この追分より大津絵ぞめ
町づきろう針箱
大津絵うどの店多し

走井

此餅や
の庭より前
某乃
拙好
にて庭を
造作と
云書と
出て景
中舎云と
云詩みづと称
せり 今
毎年旅人等
茶山屋浪
出く其名
あるうし



築山
名流を
て今のハ
其形をう
たせ一とう云
ふうし
高あるどる
其余風もうへ
うう築山のよ
に小亭あり是を
ふうけの亭とい
内よ小野小町百歳
の像とて笠縫ニを
おさる老婆の像あり
石の高きあり
小堂あり世
基師とう
石佛あり

名所

走り井 今一里慥の餅屋にあり

そこより少し坂の登り口に志賀の清水あり

あふ坂の関 いにしへ志賀の清水をほえんをなげきけむ

清輔日記云 唐僧鑑真の条にらく車よせてあしびきのやまのかけ道ゆきなれてこえもやすくもあふさかの関

堀川百首 後成

志賀のいけ水の雪ふりつもるころまでありとえぞ見ぬ

両國寺 虎斧山と号く 斗やの津にあり 一宇石佛の薬師を安置す 甚破壊して門もみえず

むきうちて戸をせり出すや雪の朝

近江國滋賀郡 あふみの国の里々郡志賀郡ともいふ 湖水の西の岸をいふ

漳九社 社三あり 志賀の荒穴

逢坂山 東の城戸 青坂

日本紀云 弥功皇后既に三韓財の國を獲て還り給ふ 誉田天皇を孕給ひて降延せ給ひしを仲哀天皇の別嬪 熊王

足を曳く密に謀て曰今皇后皇子を懐て朕に悪く後よ必ず幼主を帝と立て我を誅べし其前に迎へ滄海に沈めんと私を通じ私を后の私となさんの諺よまりせく山城の兎道に到てこれを結自川の小屋屯して三軍を令して本刀を佩て既に皇后の命と詐て君王を得べし願くは芒を解て河を投ぐべし武内此を聞て芒を解て河を投ぐ芒進む忠雄敢て遅て逢坂に遇て仮破る朕に其の処を遮坂と号くこれが故也

忠雄王逃くへだき石もち給ふ

淡海海

あふさかの関旧跡 日本紀畧云 延暦十三年 桓武 廃近江國相坂関刻とあり 其始て置く所未詳 日本孝徳大化二年関塞防人を置とあるは若此歟 始めしに やと奥原氏もいへり。拾芥抄云 三関の名あるは皆畿の辺方に置しものもあり 鈴鹿 不破 相坂 東國西國の往人征馬こゝをこえざるはなく都近きあたりなれば往来もまるで歩き慣候の

武内宿祢
忠臣王と
逢坂にて
戦ふ

逢坂山

一名を向山

手向といひく往昔旅行人くさぐさの
爰そ綺麗かいろ〳〵の紙をぬさとして
に方〳〵ちらし乃祖神〳〵を向〳〵へ
其手向の山
山よかひねぎる
いかゝね共
都よりぞ
まぎさし
敢冥加もれが
必此不知哉
を向せ〳〵ぬ
を向山の名も

後撰集 巻四

あり衣見を今タゲとの名を則たむけの
轉語なり 契沖説

名ゆゑ
あふ坂
山
さゝ
人
ゆゑ
もる

あふさうふの秋歎きあまごぶも暗を

所名 故事

地名 ばかりよく〳〵もろて古歌も多く。○関屋の淀い此ところにもみえ大津の市中にみゆ。○もつひく未詳。○菅の関 古今 あふ坂の関 まだき拾遺 源氏関屋巻に、関ちかきさもうき〳〵やまぢにて人をも障のおもかげ浮ぬるかなと関戸関清水 岩清水 今八幡の瀧九の社内にあれども長明無名抄にその附近にあるよし見えたり。○既に水もとまるよう〳〵なんくさ 明神 男の明神を関寺清水 古今雑体 君が代にあふ坂の井清水こそ行すゑとほくわき出るらめ 此歌にて見れば蔵人所の井清水にあるべし 忠岑 拾遺抄 延喜の御時月次の屏風歌 貫之 逢坂は関の清水に影見えて今やひくらん望月の駒 貫之

所名 故事

関の小川 又関川とも 金葉 青羽山紅葉ちるらし相坂の関の小川の水の色 新千載 誠て後拾遺 あふ坂の関も神やゆるさざらん 俊頼

今山上に瀧九宮二座東西にあり 由来後の条にあり 此瀧九を関守神とも瀧九と名付しにや 秀吉連歌の懐書に見えたり 〳〵右上下に見ゆ 秀吉連歌の懐書に見えたり 昔関有ごろと神祠を置て市に市姫の神像を飾るがごとく〳〵東鑑等に八幡の神を奉るがごとく〳〵東鑑等に八幡の白川関の明神と奉幣とみえ関守明神として今も関戸明神とて不絶祭りするもみな

○小田原陣中に秀吉朱印状小条氏政を責る附大津上の関の明神あて天正十八年六月十八日地を人渡申候事 連歌百韻あり 連歌多くあつめくる故に此集長成

紹巴 清正 昌叱

故事

駒迎 駒牽 むかし毎年八月十五日に諸国の御牧のるを天覧へ貢奉るとてあふ坂の関を乗る 左馬寮右馬寮の官人此所にむかへて

牽をとこれを逢坂の關迎とゝ牧とハ玉ゟ渚國へ往て馬を飼しむるを御牧ゝ其國ゟ甲斐武藏信濃上野
逢坂のゆつけるゟ十七日ゟ甲斐猿坂廿日武藏小野廿三日信濃望月廿八日上野ゟ尚國上ゟ況を

ゆつけるゟ君のゆさをみくもつゝ　閑院

ゆつけるゟ山の中さゝき淵に燒の杭そゝやけまさせをゟゟ鵜ゟ山をつけ況方
の關ゟいつゝゟ逢坂ゟ玉一方の關ゟもばかくよゟゟ

なげみそだゆつけるゟかゝ衣ゟゟ袖ゟをそてゟ

龍田ゟ大和路の關なゟさゝを逢坂ゟ
南の秩田西の穴せなゟ

関大明神　禪九宮　せきだいみやうじん　ぜんくぐう

今ゟ北に日ゟ此社へ遠洲ゟ遷せゟる神ゟすハゟ九月北に日ゟ北一日ゟ清水明神へ神輿をうつし
三圍觀音　尚ゟ蓮如上人の名號石ゟり庵ゟ弘光院ゟの額ゟり蛭ゟの蹲ゟをゟゟし

関清水禪九宮　此宮昔の圓寺明神ゟそ今ゟ三井寺別所の内近松寺中ゟと也ゟ

拜殿の柱ゟ表ゟて云　関清水禪九宮、醍醐天皇第四皇子日本國中説經讃語
勸化師者曲藝者等ゟ祖神也　右等ゟ者之免狀當本社ゟ出之也　○関清水涌出
源在本社拜殿之前　○小野小町
○小町庵　室在本社少北西ゟ云
○小町姿見石在本社ゟ

祭禮の日ハ禪九蜀紅錦の御衣ゟ黄金ゟ長刀金拵模刀等ゟ

関大明神
禪九宮

逢坂駒迎

拾遺

あふさかの関のしみづよ
うげもえく今や
ひくらん
望月のる 貫之

金

逢坂のせきの
岩ねど
ふみならし
ふるき
わらぢ
すてし
駒かな

公事根源云

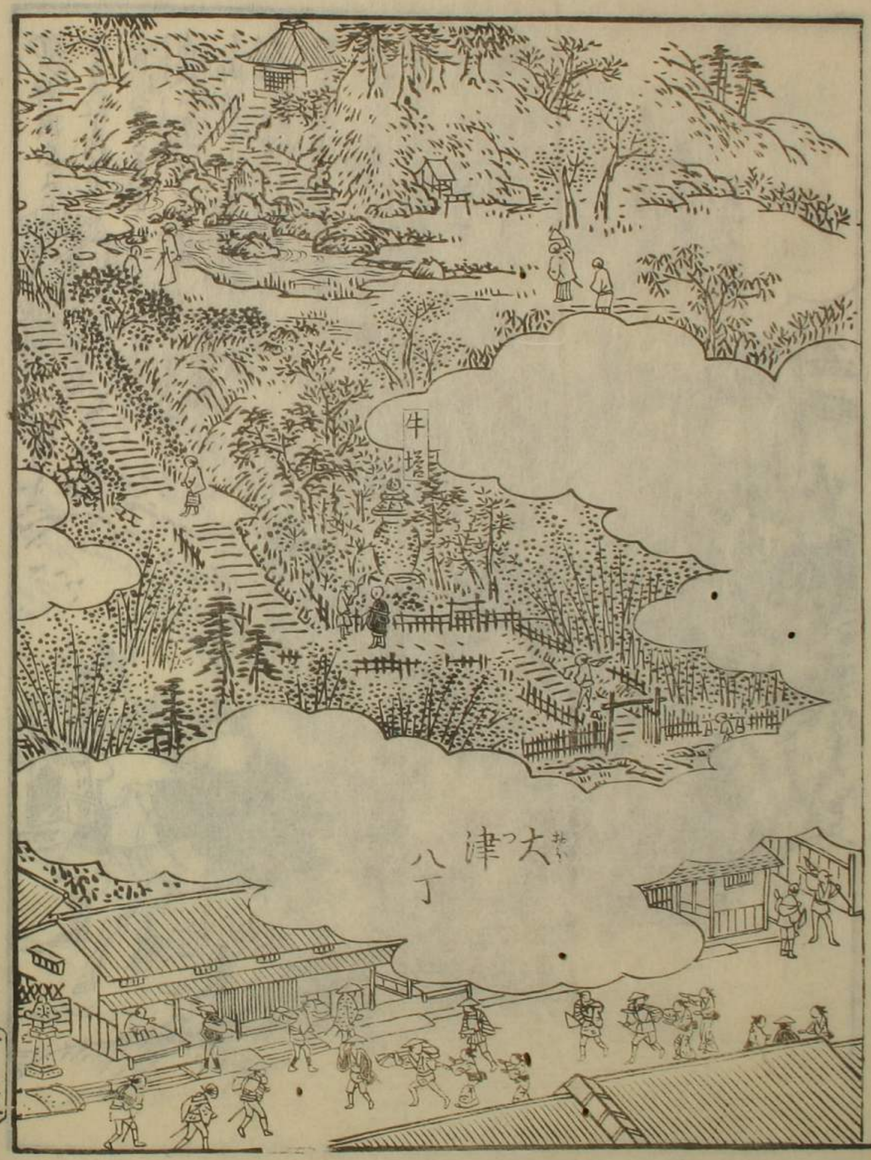
々六位信濃の勅有
牧の馬奉る
正勅有の根源也
式ありとぞ

引くや
結びつるらん
栗毛
駒

院の御厩忌よ
あるにより
六日、つかさ天皇
南殿へ出御ありて
を御覧じ上る御馬の解
文馬の寮
是て公々次第
をたまはる馬の
つなをとりて御前
みてくに一拝す
取のにし
野行とそ

院
東宮
ゑびき
まつる下略

長安寺
関寺
関清水
観九宮
小町庵
大神宮


牛塚
大津
八丁

そら祢く渡津ある其に先驅のるゝて國〻の說教流の者黒き
塗板を其國郡姓名を記してさげ給ふを說教者の礼と
ふ按るに此說教濫觴ならん今の俳優の如き者にてもとより
か中世ふるく〻ゝ音曲者のごとく歌ひつゝ手多分うたひ
るごの中へ〻〻〻〻憂苦のあるふ其名称ふ
非佛教人をまねるふ其名称ふ
今三弦を琴ふ

○蟬丸ハ延喜帝第四の皇子
其證ふきこえて書こゝもそを論じて異說多し
ふ敦實親王の雜式ともに
べし今昔物語ふ博雅三位ふひるゝ人ふ未嶋とやの国つぶさふ法師ふ說
習ひおぼひよりくゝ云此を盲人ふ混じて蟬丸も云盲人とふ
蟬丸ハ盲人ふあしざるもの後撰集これやこれ紗もうるもふ云ふの掛書
ゆくゝの人をゝくゝくゝあそこ
水戸學士の一說あり先ふ記を
○唐南朝ふ帝の諱を延基ふ
を相圀ふ人ふ事ふ
紗名付しふ今此ふよりて日本の蟬丸の事ふ考るふ延基とキの字の音ハ弾ふ

関寺小町

関寺小町の旅寝を敦盛秘中の秘曲にして其人くらゐあらざれば容易く近づき難き上乳奈會妻にも子をも見ず

と障子など移れりつゝ相國と稱號ありしもおぼつかなし
むかしの人唐のえ帝の故事のごとく帝の故事のごとく
のものも右史考巻三十一まで人〳〵うつゝ
知れりつゝ弁をかんで大宮人ふつゝ
てお坂の関のかうゝ弁慶が立つゝひ
足やこのいと身のかつゝ
○按るにつゝへの位名書へ唐の故事
ゝ後漢西南夷傳ゝ三郎の天竹を
故事をもつゝて他もつゝ

関寺 古の逢坂の三井寺五別当の近松寺も
大きうく坊舎も数多ありしが
長安寺 元関寺の跡ゝ
なり別し寺ゝ関寺の古図ありて
ありて帝をも祝ひ○小町
小野小町年老ゝ関寺の辺ゝ

このそれなり我身のそや
又老蘂の様ゝ書ゝ

終るまで身をはそやと
或云小町関寺に住ゝ
人世の盛衰をさとしめんがつゝ

牛塔 関寺長安寺の条にあり古図に
又牛の石塔ありしも今ハ一
○

巣塔 慶長の乱ゝて今ハつゝ其塔中より
掘出ゝる仏舎利ゝて近松寺へ
○**関寺** 或云長安寺の名ともゝ
の関ちかひゝ大伽藍も近松寺
ありれば今西の禅丸の宮のうゝ
の地ともゝ
ひゝくゝ小町
もるらん尚三井寺別当近松寺
の地ゝ其
ゝ

近松寺坊 西本願寺掛所
蓮如上人の御坊長孫の法橋中より御依の筆
日華門を大谷御坊へ賜ふ
ゝて大谷焼排ふ甚
寺ゝ教ゝ
多附せらる上人
地ゝ一説ゝ伯ゝの御坊
文明十一年正月朔日

諸國經歴ゝて又三井寺へ
彩像と芸ふ近松へ
ゝ来ゝ石を三井寺へ
ゝ其旧
ゝ

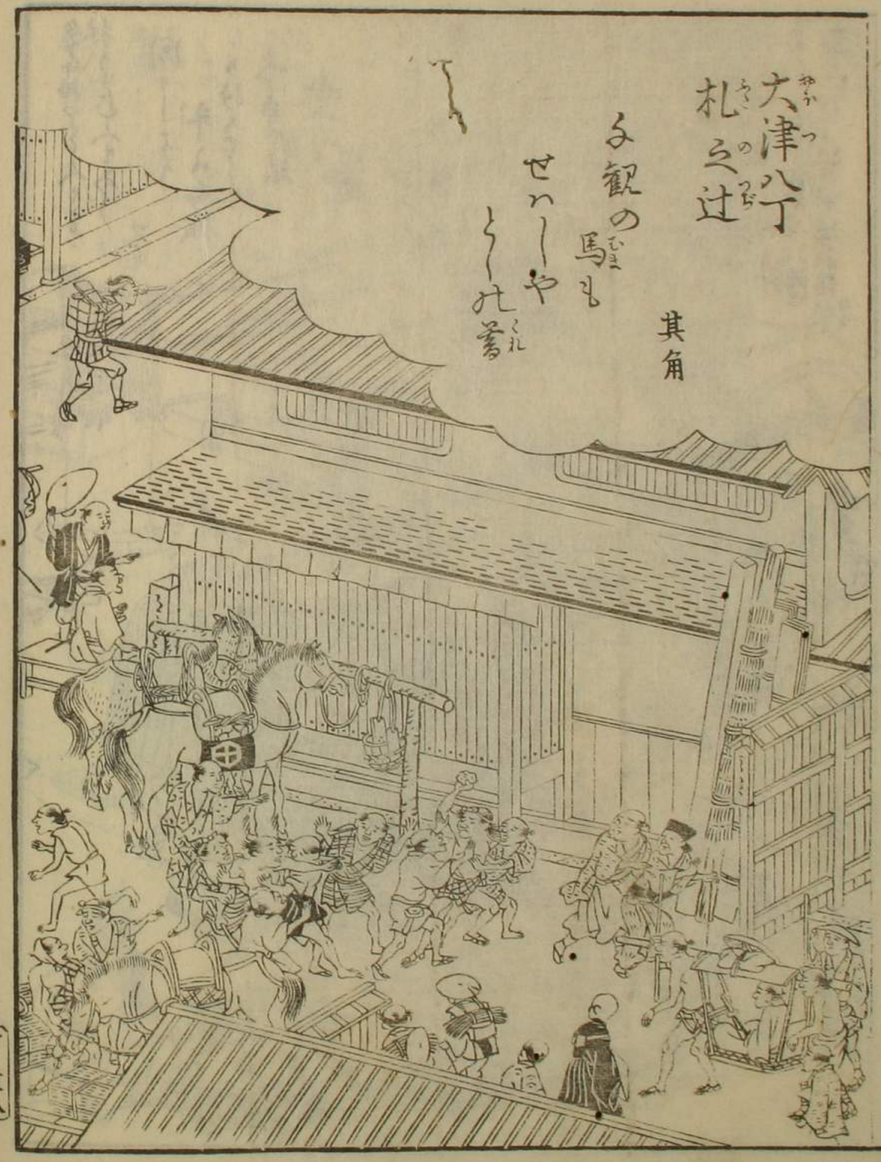
蓮如

関寺　牛佛

栄花物語巻の四の巻に万寿二年五月に
曰　関に牛佛あるにおぼしいでてこころざしの人々
参り給ふなる事ども此寺まうでまほしう侍
堂など建給ふべきを仰らるるなどえもいはぬ
ことどもをそ〳〵〳〵中略まことに
そうに侍むこの此牛ばかりぞ
我もろともにふ佛ともかくの
を仰て堂を建させんとて年
ごろこころふかくおぼしめしたりけるなり中略
つるぎ給ふにも仏ざまをかく
きこの牛の心ざしにもめでて世の中
よおい〳〵〳〵人参り給ひぬるな
く中略唯帝東宮宮をぞ
兄弟〳〵まいらせ給ひ
半佛〳〵〳〵中略聖
徳
像を画んとて急ぎ

ク〳〵中略つぐ人くも
参りこむ人もあり
ろ
関〳〵ろ
牛よ〳〵ろ
ろけろ〳〵
ふこ春の城郭
あふさろ
の関

人〳〵あきうこ
日ふるれば
此河形と画ぜく六月
二日を河服入んと〳〵
々の祭は其昔あり
此御堂と山牛三ゝび
めぐりありきそうくの
ゐにぬり表てやぐく
引ぐり中略そろぐら
其ゝおようづこて
供奉〳〵ろ後ゝ
形で内にも宮ゐる
ゐいろこそあれ
のせうは〳〵


大津八丁
札の辻
其角
名観の馬も
せいしやくれ

大津 日の宮祭礼山

九月九日十日

西行橋や町
源氏山中ま町
折水山中わり町
西豆母ろ町
龍門滝ろう町
神楽笛田町
石橋こし町
猩々ま保町
西の宮旅や町 湯玉や町
神功皇后 孫阿町
毅生石柳町 月宮殿町
郭巨ぼか町
都合十四番各金ぴか漆
之飾り物 綿繍 後綿の帷
幕を張て木偶機関の
巧みをつくしたるは
嶋弥幸月を大集ス

遠物荷ひ物

造花 琴町 汲汲来や 獅子 八幡 観光峯入 槍川町
道祖神 えと町 鉾小唐 御伽町 唐子拉町
御供所 唐子拉町

八月十六日の御輿拂ひに
付く其日引き仕廻ふ
笹百石町より紙花
御綱を出ス

九月七日 山飾
九月十六日 御輿洗

天満宮
祇火神
手洗ふ場

松本社
靴鞠神社
常世社
庚申
本社
旧宮社

霞人 年比は十方のむ免が香　竺一撿校

其後山科真影堂成就してうたし奉らんとせしに三井寺乃
衆徒足を拒んで真影を停さゞれおひく上人等ゐの御
影を写して影像みな絵山科焼亡し
てより影像絵不くいう今京西本願寺の尊影芝と
を水車のくるくるとも日る分の内かうと云経の名号ハ
を松寺ゐ毎年七月廿四日千部佛とゝもう拡ゐせらる
大津里　渡海志ゐ町数九十八町人家四千餘軒四道の往候うて
人馬牛車をゐて洛中へ運送をる事不絶馬ゐ大津馬とて諺
にもよめり各逸拡ゐ絵車のくるくるもるく
やりつけうと　挙白集にも書うり
関こえく　芳るゐは逢坂の名ハ天智天皇の郡よりつゞ
秋の日もなう〳〵れゐの紅葉ゐ大津の里絵めさ〳〵うり　降祐
此地へまいけしうれ町数も芳ゐ拡本と日名あり

札辻　京町　札の辻うり南へ約四丁
城趾　今官廳の石壘水中ゐ沿ゐり大岡の時代
京極宰相る次のうり家

打出濱　これを打出の濱とゐ
つゝとぞ　四ゐの津ゐ打出そこれが近江の海ゐゆへ名ゐ浪ゐ立ゐる　湊人乃和
本曾ハ郡よりうり〳〵ゐ方南集ゐ前の勢多ゐ橋ゐ
右のゐのうち松通うり松本の濱ゐ
あふ坂をうち出くれ　湊人乃和
逢坂山
四宮明神　其一地の通うを参社
名目抄云ゐ近江国志賀ゐ郡ゐ非社俗ゐ
賢木殿〳〵ゐ宮ハ今ハ神ゐ
笑本ゐ日宮の社中ゐ要ゐ処ゐ
とハ別ゐ建来の館ありとゐ
松本村松本社　蹴鞠の神ゐ
羽院上皇鞠技をこの神ゐ
園ゐ遷座ありしを無史の後今の地ゐ

蹴鞠精神

菅間集

侍従大納言成道の卿い
蹴鞠のみちに心ざし深く
古今のめでたきわざ
まゝ或夜棚に置
るの鞠をまろび落
来りぬとおぼしき物の
人して手足身い猿丸
にく三四支の小児ら
ひろ着三人ばつく
鞠のさまをとりどり
さまざまの行儀を
と向給ひされが
我い鞠の壁ん
昔ようかを
ま鞠を婚せ
給へ人ぞまこ
おいまさず

ゆべきのありそ
給りうとく
眉よかをる
饗とゆとさ
まニ人の額
春陽花
のさかり
又二人そ
夏安抹又一人も
秋園のさみそこる
舎ろこん君御鞠奴ませ
給へ代い風栄一宦譜ー
余ろぐ猛あんの御鞠
の時いへくらる松右が
おづこひま給りて宮づく
仕り御前うとぬ給ーせん
ととかどよ並多いへんど
ちりぬされば鞠を更る
ことぼ紙性が額の落と
ほとろり

石場

義仲寺

馬場村にあり一遍上人の開基なり

義仲の軍に活和源氏の後胤源の義賢の子なり幼名を駒王丸と記すと云ふ

義仲の木曾にて一字を遣はし義仲と名乗らしむ

義仲討死の後胤源の義賢の子なり幼名を駒王丸と記すと云ふ

義仲寺と此寺とを一石山寺のまるく中略

石塲

あり。猫ばゝと云ふ遠見燈籠あり

琵琶湖

琵琶湖は近江の国にあり湖魚鯉鮒鰌鱒うなぎの類をうつ

義仲塚

義仲寺と此寺とを一石山寺のまるく中略

天文北二年あるの墨

の末曾孫

今義康と云ふ

義仲討死の後胤源の義賢の子なり幼名を駒王丸と記すと云ふ

義仲討死の後胤源の義賢の子なり幼名を駒王丸と記すと云ふ

義仲寺と此寺とを一石山寺のまるく中略

義仲寺と此寺とを一石山寺のまるく中略

義仲寺と此寺とを一石山寺のまるく中略

義仲の横逆をみて能く義仲公を守り治承四年
戦ひ利あらずして終に利あらずして栗津の
ようやくちかきあたりまで大雪ふりたる
○芭蕉塚　并に祠堂　木像　當時其の角去来をはじめ
門人是を営む　其の後天明年中翁八十回の忌を
み改建る祠堂の内み人形三十六人を画き各殺るを書て堂内ふ
掛　翁の嗣子桃印（翁八十歳にて没す）　松尾氏名は宗房　志ち
多年江戸嗣子死去と公羽其の死を
みよりてうせ　翁の遺教を奉じ
ずくに深泥して名付抱青とう
結び泊船堂とう　芭蕉一株を植ゑり是ようて
芭蕉翁かしてより

死の雲　猪を上野うしろさくさう

眼前の実景をのべいへ源川よりありてのちかへりてそう
を消しうくみの実にあらずとそう　旅人のこ日
りのとそい茶の招請ひの末なたり

隠里のようなる所を行　奈良ふるそう那

乱の吟幻化にして西風の師と仰ぐ其の後いにしえ地裏へ仮りくれば
栖一　此うり那

其年ようえ津路不の人のつ
て杖ぶる年あり元来混乱
いえれ須广の浜泊多深の翁
住たう旅のこ海や却こう

みちのくの紗衣の雫も十餘年の間袂と笠とに
其後行脚の扱卿ふ庵をかまえ
うえ門人あつまり翁をしたひて
旅み病んで夏も枯野うけまえ

いなづまきやまうひとえまで
緑ふかい浪花津の家に
本曽根と並べ
永大坂服部の連衆まねぐる

本曽殿と斉中合せの
沾い普請の柏尾芭蕉ねしをそこうえ
風雅ふ二十余州ふ蒲播門人をつ
をうじて好人の祠廟とう今諸
天満宮　此傍み北ふ芽花
祈禱を構ふ
八大龍王社　服部の塚下る
八の宮とう

其年ようえ津路不の人のつ
て杖ぶる年あり元来混乱
いえれ須广の浜泊多深の翁
住たう旅のこ海や却こう

みちのくの紗衣の雫も十餘年の間袂と笠とに
其後行脚の扱卿ふ庵をかまえ
うえ門人あつまり翁をしたひて
旅み病んで夏も枯野うけまえ

いなづまきやまうひとえまで
緑ふかい浪花津の家に
本曽根と並べ
永大坂服部の連衆まねぐる

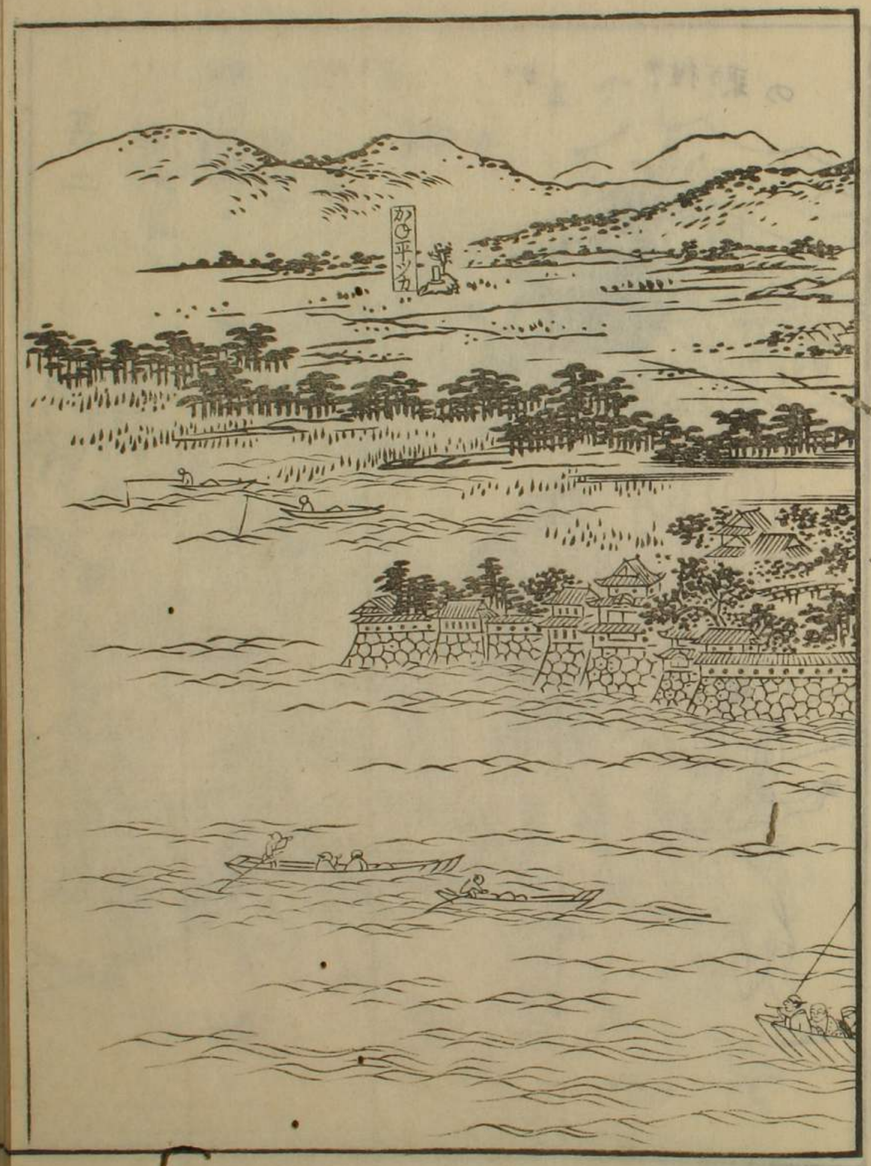
本曽殿と斉中合せの
沾い普請の柏尾芭蕉ねしをそこうえ
風雅ふ二十余州ふ蒲播門人をつ
をうじて好人の祠廟とう今諸
天満宮　此傍み北ふ芽花
祈禱を構ふ
八大龍王社　服部の塚下る
八の宮とう

九月朔日

○八大龍神社

○馬場村　○別保　園分寺かる
○服部　業師如来
東武醫官吉田桃源院法印常

膳所



其二

山王祭礼の時
供御の料よ
とて腊不の
町にて七日
莚ようより
一塲
を
かま
へ
往来
の

膳所 むつ〳〵ようの日吉山王祭の神供を芸を左よ膳所と云大圀記
を手記よ是世ともおり古へ此地い栗栖名産なり○膳所の城えい来及て信長公明智日向ちよ退治
次をを守る其後戸田某此地うけ〳〵築くとうへ
おもの〵濱 膳所のお名ちり名所佳膳の
拾遺和集ニ
とくとうへふるかりもあしとう近江なる
おれい安元年中大掌會日俗近江の高とおりのこうは御膳のうをえと
膳所大明神 所祭大梵天 城の大手にあり元弘三月三日菊よりこれを栗津
えを城中よ大なる松を神本とす
後拾遺
あら磯をとう舟をとめよ
をぐらのとときのう説くあり一説よ此地一種の名ともうべきともみれど
兼平寺 粟津御菩提所縁心寺の境内よあり石塔道光大居士
兼平塚も日時手建
栗津 粟津原 栗津野 栗津の川系の渓にあり幸縁未詳一説よ田畠某又かげ
山王祠 兼平を田畠の宮とう川ろの頼朝の感状あるとに此地よあり〳〵元供膳のう
ろふ姫とうへ老者ありて頼朝公よりそ〳〵ともうひ
ふ今山祠をム王神うの御供物屋とうとに祖
〇かげらう社 社の名
〇塚 街道の左右田の中よ其形状をもって

八幡社一座 末社 膳所小結よあり義仲弟巳女を祭るとうへ〇五百羅漢
守る川 よの〳〵上のりろこ川とうへも元八回名にして若栗津の
森をお誠うまとうれが来誠川の地〳〵ふれり
兼平塚 膳所の松本より二町西田の径うまうへの塚あり膳所城を建らる
尚図上よ記を
兼平が塚 鬼貫
鳥居川村 茶屋ありたりへ行が修多を左へ行よまでそうふ
▲御霊社 三井寺の縁起又勢田合戦の条うへ
▲芭蕉翁ノ庵 滝田院 石山の奥石間の後園うとあり翁の記ありて
凡俗文選猿蓑集よど出ふう
▲ちくさの薬師 貞徳
庚天三年三月建立此地の年の石佛なりしがある村樵童什石佛
夷曲集石山へまうでるとあり猿蓑を繋〳〵石佛あるこの声を数を数へ見つけうとうへ
石山へ行くかち人の什事よあるやとて足をやとめる
▲螢谷 夢浮橋 石山の林東よあり
大きなる河と同じくして地名よあり〳〵源氏物語よも差のうち橋と標数よ

粟津合戦

今井四郎兼平いつさ
ゑうまなんで敗亡
み十騎を率ひて
義仲をめぐま
あひ随ひ
先陣一番
四郎を追
ふ間を
仲討れ
ぬ
その跡
石田次郎
ハ向ふて
曰これ
ゐ東国の
このごろ日本

一の討の者向
寄をる
ようて刀の
をつよ含んで
馬ようさうさ
まふ
つぬん
て突う
ろ

平家物語

へ如〻これと文中よき景のうえ拵とつづきてある〻実社後の景のうえにて暑にまうく撰雲の景
とよく絵へるに景のよき○拵るみ社〻ある地これが好事の人景とふ詞幻添て玉乗集に系融院石ふよおそ〻ます附九月九日石上人もうき拵とふ石へまうくて侍り
我こそは神ある石ふいう拵うきにいうふ景ぬる社ふのふ〻ん　公任
○石光山石ふ寺　勢田の如意輪観音ふ弘十三番札不開基ふ良辨僧正天平勝宝ふ年草創　元亨釋書曰聖武天皇ふ寺と創造〻給ふ十六丈ふ金銅ふ盧遮那佛ふ大御像ふ鋳奉らんと発願ありて良弁ふ沼おり和尚金峯ふ金剛蔵王権現ふ感応ありて像ふ面ふ金ふ塗て日此ふ像ふ美金ふ得させ給ふ〻ふれふ今海ふ別当ふ御坊ふ〻ふ如意輪観音ふ自在霊応ふ地ふ〻ふ勢田ふ橋ふ本石ふよふ景ふ法良明神ふ〻ふ此地観音ふ霊區ふと拵ひて如意輪観音ふ像ふ彫奉ふ武帝感応ありて〻石ふ寺ふ〻ふ〻ふ〻

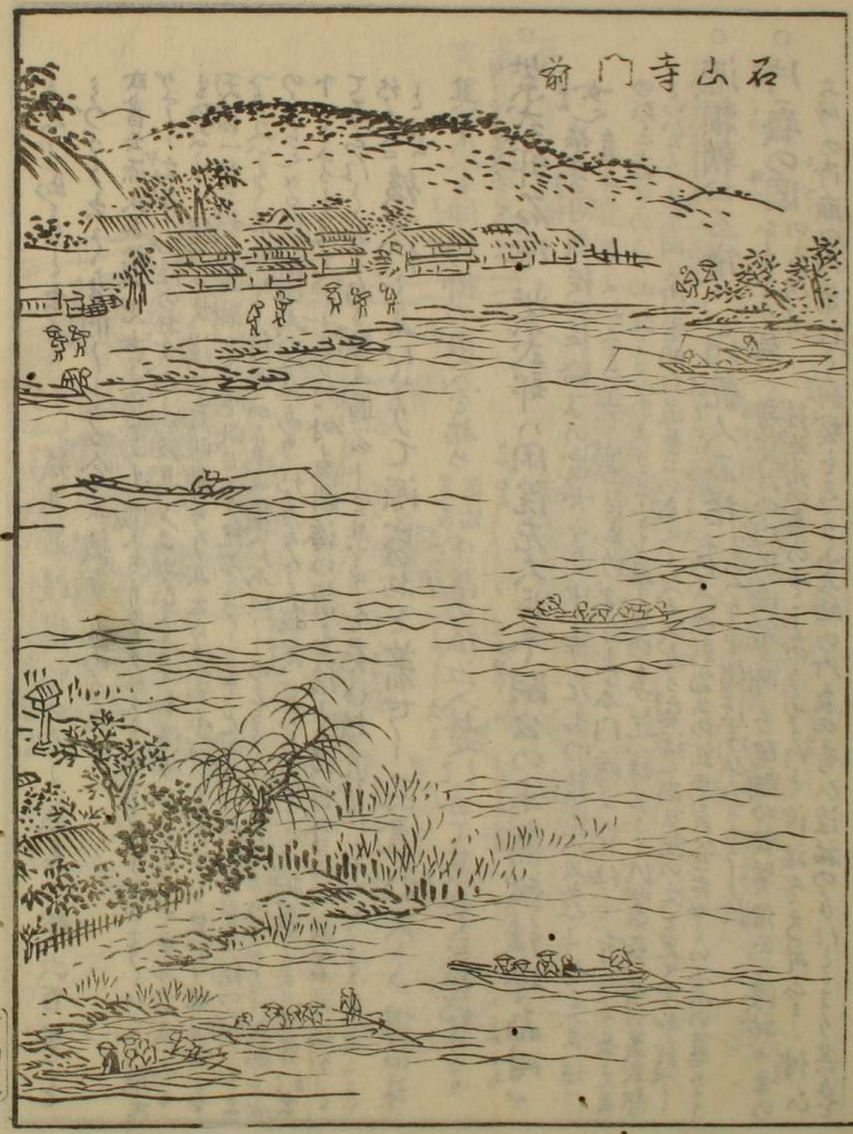
橋谷雲

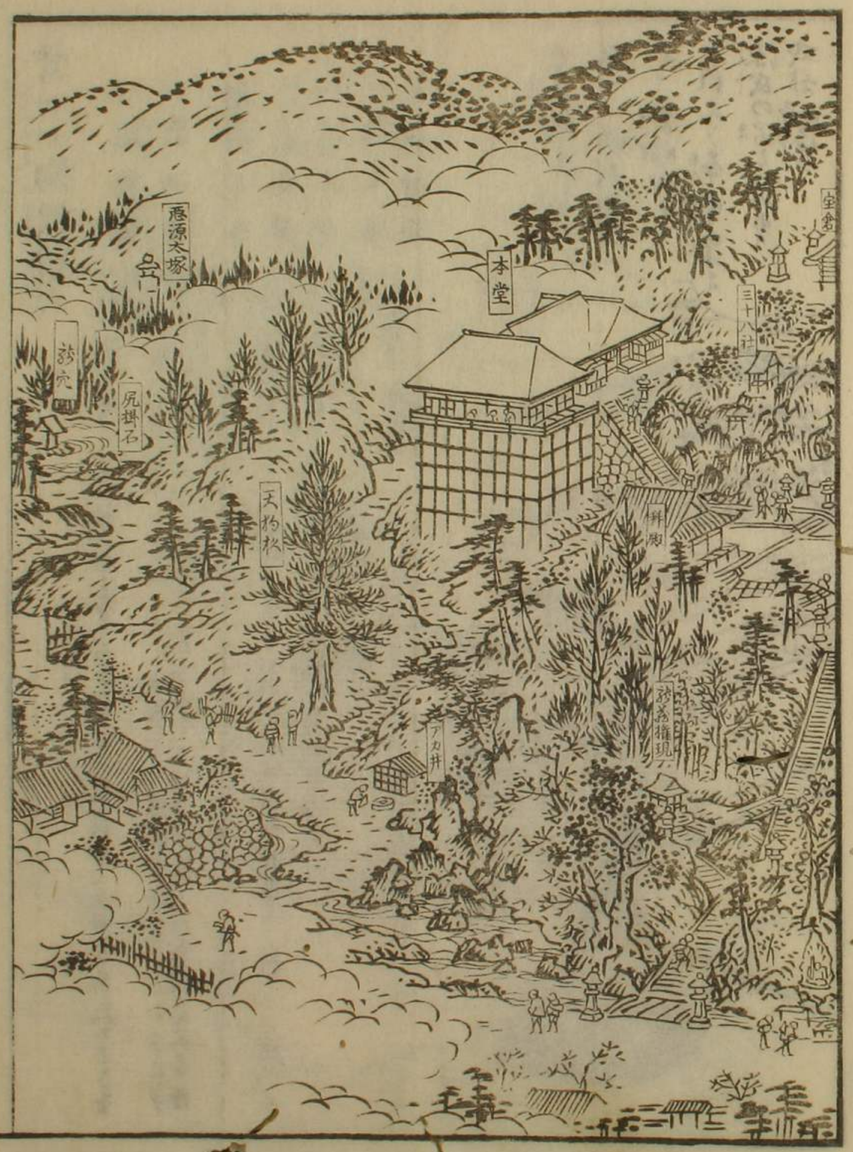
小石川植物園の梅
東叡俯瞰の景
まで九二十八町
甚五郎と稱す
飛泉の光まぶ
そゝき聚るとても
又あれ水上人の
初までもひくく
向至のころ芒種
の後八日より夏至
の後八日までそ
凡十八日のころ盛り
あろうう今夏至とも
く小暑の名くれば
川又そろそろ涼しく
のろ蟹へ

うごく
くち葉
蛍い
おうて
ぞう
ろひ
くれぬ
谷此
うけ
くさ

とゝろ〳〵出くとゝろ
うづゝゝゝゝゝ納〳〵多し今其他
武書云源氏拙語ハ児女子のロよりも喝〳〵
ぐ〳〵文筆凡俗のわざみ〳〵ゞ其つゝ
ものゝ〳〵儒学史漢のお此拙ぐさゝ
天縦一心三観の血脈をつゞ江日本紀を
つゝ又いそ〳〵石山にこ経巻の裏々須ゝ
のうちゝゝゝ紙縫の人いうみもり給ふ
ト〳〵ゝゝと獨笑せられ給ふ
て石山にこ〳〵おもひ給ふ坊み遍参〳〵して其
給ふきゝと云 後世代〳〵みひろうて源氏
其中にも伊勢物語の奥を始め追注加中院の源氏の称と著せ〳〵其書数大ゝゝ此品斗

○紫式部石塔 紫式部ハ閑院左大臣冬嗣公の末裔越後守為時が
女〳〵始終る冏殿後二位倫子の女房と嫁と長保三
年ゝ宣孝よおくれ一つ〳〵寡〳〵め
のはゝ花ゝ旧記ゝゝ色ゝゝ〳〵
といひゝゝ系図ゝ御堂関白道長ゝ妾ゝ
○源頼朝公石塔 ○日乳人石塔
○片履の図 ○普門院の内
大師の御廟の御前ゝ刹竿ゝゝ


石山寺門前

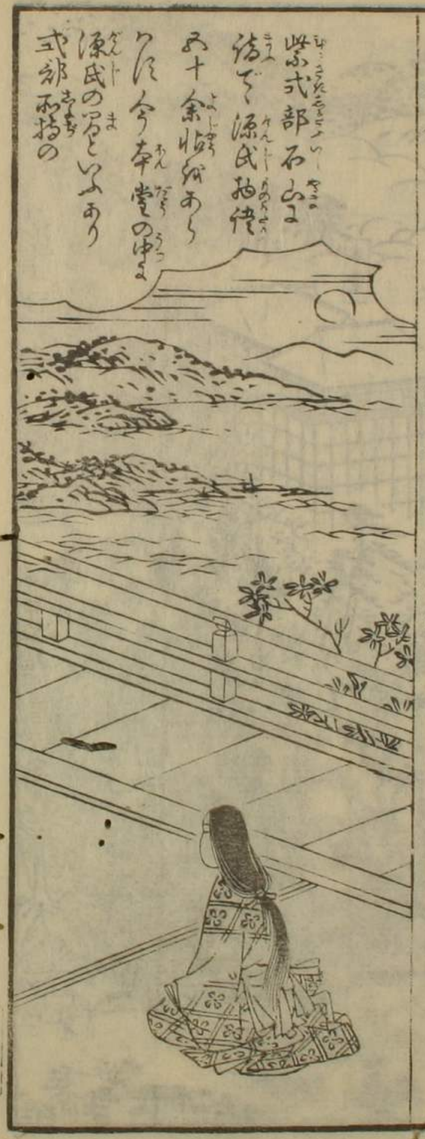

源氏塚
本堂
三十六社
硯水
尻掛石
天狗松
神廟
珍奇猿猴
力石

日本
石山寺
鐘楼
祖師堂
護摩堂
扎堂
食堂
硯水

紫女七論標題云

才徳兼備　式部が才を賞し
七事共具　紫女が徳を論ず
修撰年序　紫女が七事の時代
文章無雙　紫女が文章
作者本意　紫女が作意
一部大事　紫女が一部
正傳説誤　紫女が正傳

紫式部ハ
紫女ト源氏物語
ノ作者ト
ナリ今本堂ノ
源氏ノ畫トナリ
或ハ基ノ博学



仏て霊教をうるせる紙旬ひの聖教
此山記事よ脱一つを誤せーなり
伊の僧の妄説ありべー

○龍穴の池 平生の西南よあり昔の
雨を乞ばるるに此池のそこにあり昔海和尚とゝ人此石の上よ座しく讀
経せー故よ其名ありとゝ

○磨海屍掛石 瀧穴の池のそこにあり
○弘法大師 剃髪の名号〇武部自筆の大股若弁硯石〇滝祐旬ひ
の聖教 皆寺宝とゝもゝ
何の流もゝー

都にも人や待らん石ふみの
岩よのこゝろ乱れ寺をーそゝ

長能

○悪源太義平ゞ塚 本堂の西よ中よあり
○もゝてやう治川も湖あの事ゝく勝田上揚谷ゟ引てゆう治へ
○揚谷の瀧 勢田川早水の対 岸よ有ゟ
今よある巨石の割ゝ百官の往還
山のうへにて今ゝ仏の彩物ゝとろはなの迷風ゝ

源義朝の嫡男ゝて十三歳
にて頼朝公ゟわり十九歳ゝて都ゟより
平治の戦ひよ異なる功ひ出もなくくらし
石ゟるゝそせ捕ゟるゝ云ゝ条よ紛て雑波三郎よ着をかゟりて
見ゝう出ゝまゝ父義平の霊雷ゝ
雑波三郎を殺ーなり